

を肯定的に用いる際は、根底に他力を携えた「自力」を指していることが分かる。

もう一点重要なのは、清沢がそのような形で「自力」について触れていた、という事実そのものであろう。ここには冒頭にも述べたように、時代、社会の状況を鑑みつつ、宗教の真理性を叙述する清沢の柔軟性とも言える面が見える。近代化が推進され、人間観や価値観が変貌していく中、「自力」を始めとした、人間の「活動」全般を宗教的見地から否定しても、世間から顧みられないう可能性は十分にある。しかし、「自力」が本来「無効」であるという本質もまた動かせない事実である。そこで、宗教表現に時世的要素を内包させつつも、仏教、ことに「他力門」の信念の真髓を伝える方法の一つが「自力」の表記であったのではなからうか。第三点としては、清沢が同時代に対しての認識、つまり「競争淘汰」がその中心となっており、これら自力を用いつつ信仰表現には、時代に対しての警告的側面をも有していたのではないだろうか。語を加えれば、人間が自分の有限性に対して無知であるからこそ、今のような人間観、社会観となってしまうのだ、というメッセージもそこに含まれていたと思われるのである。

親鸞における自然の思想

——「自」の読みを通して——

山田 惠文

親鸞は、その九十年の生涯の中で晩年といえる七十八歳から八

十六歳の間に精力的に著述した仮名文類に、「自然」の語を集中して表現している。また、親鸞八十六歳の奥書のある顕智書写の「獲得名号自然法爾御書」といわれる法語は、内容が若干異なるが『末燈鈔』所収のもの、文明本『正像末和讃』末尾に載せられているものを含めて、これまで三種伝わっている。そこには親鸞晩年の思想が端的に表現されているとして、従来内外問わず多くの論者に注目されてきた。その理解には「自然」という語が持つ性格の故か、論者の立場によって大きな差異があるように感じられるが、基本的には「自然」とは「親鸞晩年に到達した思想を表現したものである」と、前提的に考察しているところがほぼ共通している。

確かに、親鸞の根本主著である『教行信証』には、「自然」に対する親鸞自身の解説が一カ所もないのであるから、当然持つべき見解であるといえよう。しかし、用語としては仮名文類に集中して見えるが、そのことをもって直ちに「晩年に到達した思想」を表現しているとは言い難い。親鸞の語る「自然」を正確に探究してみれば、それは『教行信証』に引かれた経論釈を再度解説していく中で表現された言葉であり、特に「大無量寿経」の「自然」を背景とした術語であることが分かる。ならば、それは決して晩年に限って考察すべき課題ではなく、むしろ親鸞の一貫した思想内容が託された言葉であるとの視点を持って、究明すべき用語であろう。

このような視点を持つとき、特に注目出来るのが、『教行信証』中にある全ての「自」について、親鸞自身厳密に「みずから」と「おのずから」に訓じ分けていることである。当然「おのずから」と読むときには、親鸞の自然の思想がそこに表現されている

と言えよう。

例えば、「行巻」に引いた『五会法事讚』の、「如来尊号甚分明十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎」にある「自」には、あえて「おのずから」と読みをふり、如来の名を称するものに、観音・勢至菩薩が「自然に」来迎する意を示している。今ここで、親鸞の来迎観について詳説は出来ないが、この文を解説した『唯信鈔文意』では、観音・勢至が無碍光仏の化身として、念仏者を護念するという意味にとっている。更にこの「自」を、親鸞は「みずから」と読む場合、「おのずから」と読む場合に分けて、それぞれの意味を解説している。「みずから」とは仏・菩薩が主体である場合の読みであるが、特に「おのずから」と読むことによって、行者に転成をもたらす諸仏・諸菩薩のはたらきを、行者の立場から明らかにしているのである。

また「行巻」に引いた標典の『述文贊』では、

又云人・聖国・妙・誰不_レ尽_レ力_ヲ作_レ善_ヲ願_ム生_ニ因_ニ善_ヲ既成_ニ不_レ自_レ獲_レ果_ヲ故云_ニ自然_ニ不_レ貴_レ賤_ヲ皆得_レ往生_ニ故云_ニ著_レ无上_ニ

〔定親全〕一・五六頁

とあるところの「自」を、当初「みずから」と読みを振っておきながら、後に未で「おのずから」に訂正していることに注目出来る。この箇所を「おのずから」と読むことによって、親鸞は意圖的に如来のはたらきを明瞭にしようとしていると考えられる。よってここでは、「如来の善根功德によってすでに浄土は完成しているのであるから、衆生がおのずから証果を獲ないことがあろうか」という意味になる。つまり如来のはたらきによって衆生が証果を獲ることが「自然」であるという見解を表明しているのである。

では、如来のはたらきによって実現する証果とは、具体的に如何なる内容であろうか。親鸞は『大経』の往勤偈の一文である「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」を「行巻」に引いて、この「自」を「おのずから」と読んでいる。「おのずから」と読むことによって、「不退転」が「自然」に実現することを示している。

更に注目すべきなのが、自然には「必」という決定性の意味があることを提示している点である。

かならずというは、自然に往生をえしむとなり。自然というは、はじめてはからわざるころなり。

〔尊号真像銘文〕『定親全』三・九四頁

かならずというはさだまりぬというころなり。また自然というころなり。

〔尊号真像銘文〕『定親全』三・七七頁

これは、それぞれ「観経疏」の「必得往生」の「必」と、『大経』の「必得超絶去」の「必」とを解説した文であるが、「必」とは自然のころであるとして述べている。恐らくはこれは、「信巻」所引の『楽邦文類』にある一文、

弥陀洪願常自 撰持 必然之理也

〔定親全〕一・二二六頁

を一つの背景とする了解であろうかと思われる。弥陀の本願力が「おのずから」衆生を撰持すること、これを必然の道理であるとするこの一文は、親鸞の自然理解に必然とも言うべき決定性の視点を与えたと言えるであろう。この親鸞の了解によるならば、難思議往生の内容である「住正定聚故必至滅度」も当然、「自然に滅度に至る」のであると証知していたと考えられる。「自致不退

転」から親鸞は正定聚に住することが「自然」であると表明しているが、同じように「必」を「自然」とする親鸞の了解からいえば、「滅度に至る」ことも「自然」であると言える。つまり親鸞の自然の思想とは、『教行信証』の思索に照らして考えれば、本願力によって衆生に実現する証果、即ち「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」という証果をもたらす道理を語ったものに他ならないのである。

この理解に立って、仮名文類並びに法語の「自然」の意味を吟味していく必要があると思われるが、特に法語にはその冒頭において「獲得名号」が説かれているのであるから、これは名号を獲得することにおいて、自然法爾に実現する証果を説く法語であるとの視点を持つべきであろう。一見、親鸞晩年の特別な思想表現であるかのように思われる「自然」であるが、その源泉は親鸞が根本教説と見定めた『大無量寿経』にあり、そして自然の思想はすでに『教行信証』において表現されていると言えるのであるから、この両者に立ち戻って考察する必要があると言えるのである。

註

- ① 『定親全』一・五〇頁
 ② 『定親全』三・一五八―一九頁
 ③ 『定親全』一・一八頁

『入菩提行論』第9章

第41偈の注釈における引用経典

— プラジュニヤーカーラマティ造 *Bodhicaryavatara*. jik.
 からタルマリンチェン造 *Gyal stras 'jug ngogs* kTc
 展開 —

桜井智浩

Bodhi [sutra] *caryavatra* (『入菩提行』) については、複数のインド撰述注釈の存在が知られているが、チベット・ゲルク派の学匠タルマリンチェンにも、*Gyal stras 'jug ngogs* (『仏子渡岸』) という『入菩提行』全体に対する直接の注釈がある。その中で、第9章第4、第41、第50、第66偈の注釈部分に見られる「大注釈」、或いはその「著者」という言及が、梵語原典が現存するプラジュニヤーカーラマティの注釈『入菩提行細疏』*Bodhicaryavataraṅgi* (細疏) を意味し、内容的にも『仏子渡岸』が「細疏」を適宜参照していることが分かる。このように「細疏」の影響を受けながらも、「仏子渡岸」では中観辯證論証派 (Pr) に特徴的な理解とされる「声聞・独覺の法無我理解がある」と認める点 (【学説】) を強調し、「細疏」から思想的展開を見せている。『入菩提行』第9章第41偈 (IX41) の所説に關する「仏子渡岸」に至るまでの各注釈書の所説を、その時代的過程を踏まえ遡ること、その展開のあり方を探り、「仏子渡岸」の注釈意図をより明確に把握したいと考え、「入菩提行」IX41¹特にC、D句の解釈をとりあげた。